

関連学会印象記

第7回 心臓血管麻酔医学会印象記

(7th Annual Meeting of the Society of
Cardiovascular Anesthesiologists)

古 谷 幸 雄*



学会会場となったヒルトン・ホテル

第7回心臓血管麻酔医学会は、Arizona州Phoenix市のHilton HotelおよびConvention Centerにおいて、4月28日から5月1日まで3日間にわたり開催された。

日本からの出席者は、東京女子医大の藤田教授と私のほかに循環器センターの佐藤先生が見えただけであり、少し寂しい気がした。しかしアメリカで御活躍中の渋谷教授、丘教授、小松先生、稲田先生が出席されていたので、何かと心強い限りであった。

会場は2カ所に分れ、ホテルでは特別講演、シンポジウム、口頭発表等が行われ、センターでは器機や薬品の展示と並んでポスター発表が行われた。ホテルとセンターの間が歩いて数分かかるのは難点であったが、ランチ・タイムやコーヒー・

ブレイクをセンターに設営したのは、両会場の交流を計るために考え出した学会当局の智慧であろうと感心させられた。

ホテルの会場は約500席のGrand Ballroomを主会場とし、これを半分に分けて2部屋を作り、少し離れた1部屋も加えて、それぞれの部屋でセッションA、B、Cが行われた。したがって主会場で行われる主要な特別講演やシンポジウムを除いては、すべての演題を聴くことが出来ない。Grand Ballroomはさすがに豪華な部屋であったが、会員数からするとやや狭い感じがした。部屋は横に広いにもかかわらずスライド幕が片隅にあるため、遠くの席から見えにくかった。また演壇が薄暗いため、シンポジウムでも演者の顔を識別することは困難であった。しかし部屋全体が薄明るいために、抄録を見たりメモを取ること

* 東京女子医科大学麻酔学教室

は容易であった。

センターの会場は広々としており、器械や薬品の展示場の2面の壁側が仕切られていて、ポスター発表の場所が設けられていた。ランチ・タイムや展示場の見学ついでに立ち寄る会員が多かった。ポスター発表を行った私の体験から不満を述べると、ポスターを張る板が両面から成り、たまたま裏側に当たった場合、布と木の間が浮いて紙も糊も効かず、ポスターの接着にさんざん苦勞した。日米の学会を比較して、会場設営の点では、日本の方がキメ細かいように思われた。

4月29日、8時から主会場で Kaplan 会長と Wynands プログラム委員長が歓迎の挨拶を行った。それに関連して、前日の国際交流委員会に出席された藤田教授のお話と12時前の総会議事を参考に、SCAの現況を簡単に述べてみたい。現在のSCA会員数は1935名、今回の学会参加者数は505名の由である。SCAの学会開催地は毎年交代するが、学会会長は2年交代と決まっている。今後の開催予定は、第8回 Montreal (Barash 会長)、第9回 Palm Springs (同会長)、第10回 New Orleans (Burgess 会長) である。今学会のプログラムに関しては、多数会員の意見によりトピックスを lectures および panels に選び、また10人の査読により130題の一般演題応募の中から口頭発表42題とポスター発表48題を選んだそうである。演題採用率70%というのはかなり厳しい選択であり、SCA学会のレベルの高さを示すものといえよう。

シンポジウムまたはパネルディスカッションは、3日間に12主題が行われ、いずれもなかなかの盛況を呈した。「冠状動脈形成術と麻酔対策」に関しては、高名な内科医 Gruentzig と外科医の間で討論があり、麻酔科医はPTCA実施に先立って患者のリスクを把握しておき、万一の緊急CABGに備えることが望ましいと述べられ、本邦でも今後ふえるであろうPTCAに対して、認識を新にさせられた。「開心術後の神経精神機能」に関しては、5名の演者が多方面から討論し、CPB中の脳保護の重要性を指摘したものの、脳循環、脳代謝、 Pco_2 、バルビチュレート、プロスタサイクリン等、いずれも有意な因子とは決定できず、今後に残された課題と思われた。「頸動脈

外科の麻酔」に関しては、全身麻酔薬の選択および局所麻酔の適応について、それぞれ2名の演者が賛否両論を唱えたが、頸動脈血陰除術に際して脳保護と同時に心筋保護が重要な点では意見が一致したことから、ハロセンはイソフルレンに優り、頸神経叢ブロックはとくに優れていると考えられた。そのほか Grand Ballroom で行われた主題としては、「1985年の文献批評」、「心機能に及ぼす換気の影響と血行動態の解釈」、「麻酔中のアナフィラキシス」、「代用血液」等、アップデートなテーマが多く、いずれも教育講演の感じがした。また各セッションで行われたパネル5主題の中にも興味あるテーマが多く、私にとっては「心臓ペースング」と「片側肺麻酔」がとくに興味深かった。

「Janssen 特別講演会」は高名な内科医 Swan による Swan-Ganz カテーテルに関する綜説であり、「麻酔円卓討論会」は Kaplan と Barash の名司会による3題の症例検討であり、両方とも学会の最後を飾るにふさわしい格調高い企画であったと思う。

一般演題は、口頭発表とポスター発表を含め、90題中に、臨床的研究64題(70%)と実験的研究26題(30%)があり、ほかの麻酔関連学会に較べて基礎的な研究発表が多いように思われた。内科的な演題としては、麻酔方法、モニタリング、薬物治療等が多く、外科的な演題としては、人工心肺、心筋保護、薬物治療等が多かった。また生理学的な演題としては、心筋収縮、心筋代謝等が多く、薬理学的な演題としては、麻酔薬、併用薬等が多かった。その中でも興味深いと思われた演題は、経食道のエコーカルジオグラフィと各種カルシウム拮抗薬に関するものであった。プログラムは例年の如く末尾に掲載させて頂いたので、御参照願えれば幸いである。

ところで Phoenix は Arizona 砂漠の真中に開けたような町であった。ただ美しく広大な町並が続き、4月というのに昼間は30°Cの暑さとなり、とても町中を散歩したくなるような雰囲気ではなかった。おかげで学会の出席率が非常に良かったのではなからうか。私達も半日だけ、観光バスで市内巡りというより「太陽の谷間」と呼ばれる近郊の砂漠とサボテンの風景を見物するため、

出かけただけであった。しかし夜間は涼しくなるので、学会のレセプションに出たり、メキシコ料理を食べに出かけたり、7人の日本人同志で日米医学の情報を交換し合ったり、毎夜楽しい時を過ごすことができた。私にとっては、久しぶりのアメリカであり、初めてのSCA学会であったが、社会的にも医学的にも得るところが非常に大きかった

と思う。心臓麻酔については、文献だけからは得られない生の刺激に触れることができ、これからの仕事の糧になるであろうと確信した。蛇足ながら、私は学会終了後、Grand Canyon, Las Vegas, Los Angeles, San Francisco へと一人旅を続け、アメリカという国の自然の雄大さと人間の偉大さに改めて感銘を深くしたのである。

* *

* *

* *

* *

* *

* *